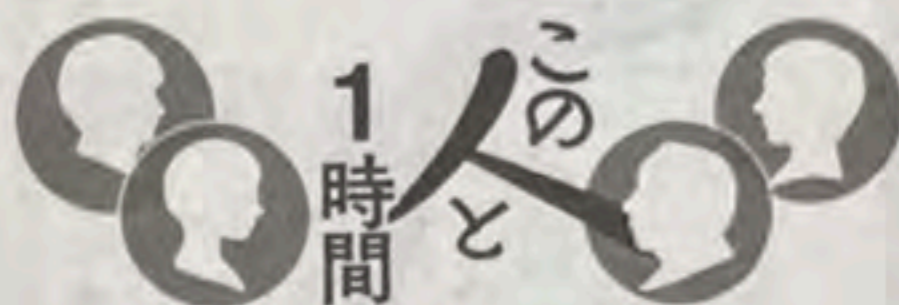


輝く ひと・スポーツ



スマート農業水平展開

農業担い手育成センターでは、どういった研修を受けていますか。

「アイトサは地元の農業振興だけでなく、高知県のIOPプロジェクトと連携しながら効率的な栽培方法を確立し、そのノウハウを地域に水平展開する役割が求められています。高知県も協力的で、担い手育成センターでハウスを提供してもらい、実際にシシトウの養液栽培を行いながら、栽培技術を習得しています。ほかに、農業経営から病気の種類、その対処方法などを、若手の担い手候補の皆さんと一緒に学んでいます」

(四国支局長・寶珠 幸司)

四国電力はグループを挙げ、四国の基幹産業である農業の活性化に向け取り組んでいる。昨年11月、2番目の農業法人としてシシトウ栽培のAitosa(アイトサ)を高知県南国市に設立した。同社は省力化に

「アイトサには、従業員を雇って行う新しい法人的農業スタイルを確立することもまた、求められています。そのため、センターのベテラン職員に対してパート従業員として指示を出し、労務管理の参考にしたりしています。その部分では、サラリーマンとしての経験が生きていると感じます」

— 南国市の現地など今後のスケジュールは。

「私は会社設立前の昨年6月から農家に弟子入りするなどして、農業に向けた準備を進めてきました。南国市のハウスは着工し、7月末に完成予定です。それまでにセンターを卒業する予定で、8月に栽培を始め、

Aitosaファームマネージャー

菊池 功一さん



9月中頃には定植、10月末から最初の収穫に入る予定です」

産地守る役割

「コロナ禍による飲食店の営業自粛で、シシトウの需要が激減しています。『昨春の緊急事態宣言以降、需要激減でシシトウの価格は落ち込んでおり、シシトウを諦める農家も出てきています。私たちは最悪の状態を想定しつつ、『産地を守る』という役割も任されています。その意味でも私たちの参入は意義があると思っています」

「私は農業が盛んな、高知市の旧春野町の出身ですが、直接農業の経験はありません。祖母がバック詰め作業をしていて、シシトウとの縁は感じていました。1995年に入社以来、営業や用地といった、人とコミュニケーションを取る仕事

「私は農業が盛んな、高知市の旧春野町の出身ですが、直接農業の経験はありません。祖母がバック詰め作業をしていて、シシトウとの縁は感じていました。1995年に入社以来、営業や用地といった、人とコミュニケーションを取る仕事

高知県立農業担い手センター内にある養液栽培の試験設備となるハウス。清潔な環境で作業できるのも養液栽培の強み



「オール高知」で活性化

「その一環として、提携先の銀座農園と共同で自動走行の噴霧機で農薬散布を行う実証を行っています。自動収穫についても、共同で開発を進めていて、一つでも手作業をロボット化したい。実際に農家さんが『無理だ』という分野だからこそ、やってみる価値がある。高齢化で産地が衰退する中、省力化して、若い新規就農者を増やすところに四国電力が参入する意義があると思います」

参入する意義

「シシトウ産は高知県が全国シェアの半数を占めます。一方で、シシトウは焼き鳥店などの消費が多く、一般家庭でおいしい調理方法が知られていないのも事実。メシのおかずではなく名産品、高知のシシトウを手にとって頂きたい。私たちは消費拡大に向けて、おいしいレシピや調理方法を発信していきます」

メモ

職は野球。現役で捕手兼プレイヤーとして活躍中。今も走り込みを続けている。

未来へ紡ぐ 電力自由化史

公益との両立を模索(5)

第3次制度改革議論の中で大きな論点当時特別高圧需要家約1万口に限定された小売自由化の範囲を拡大するかどうか。これについて、南直哉電気事業連合会長は、2002年4月の第6回電気事科会において次のように発言した。「おまの選択肢の拡大は望ましいことであり、売自由化範囲を拡大し、最終的に、一般など小口のお客さままでを対象とした全自由化を目指すことについて、前向きに考えていきたい。ただし、選択肢と自己責任関係をどのように考えるか、あるいは安給やユニバーサルサービスといった公益問題を達成できる方策について合意が得るか、ということが重要と考える」

そして公益的課題の達成について、の事例を見ると、「長期的な安定供給を確保」という視点がとすれば見失われず、設備建設を促すインセンティブよりも、むしろ使命感や責任感をもたなくみが必要」と主張した。それは、気事業者については「責任ある事業者が発送電一貫体制」を維持することであり、規参入してくる特定規模電気事業者



南電事連合会長(手前右)は、公益的課題の達成を前提に自由化